

若葉のころ

新規就農者の横顔

三重県度会町でイチゴを手がける玉村泰希さん(28)は昨年、独立就農を果たした。気温や日射量などのデータに基づく管理に加え、実際に見て感じたことも大切にしている。「自分自身の努力が目に見えて結果に現れる点にやりがいを感じる」と意気込む。

玉村さんが農業を志したのは、祖父や父の影響で農業が身近だったため。柔軟な働き方ができることに魅力を感じ、2年間にわたって先輩農家のもとで研修をしてきた。

現在は、土耕栽培をしており、配合肥料に

安定生産へ日々努力



イチゴの苗を手に笑顔を見せる玉村さん

玉村泰希さん(28) 三重県度会町・イチゴ

単肥を組み合わせて液肥を作るなど、生産コストの削減にも力を入れる。一方で、夏の高温対策が課題だと感じ

る。昨年度は定植時期を遅らせたが、需要の高いクリスマスシーズンに収量が減ってしまった。そこで、今年は

◆経営概況

三重県度会町のハウス約31でイチゴ「かおり野」を栽培し、JAなどへ出荷している。本年度から栽培面積を約4倍に拡大したことから、従業員を雇い、効率的な作業体制を整えていく考えだ。

定植時期を早めるため、育苗に力を入れる。水や肥培管理を徹底し、根張りが良く、暑さに強い苗を育てる。定植後の温度管理にも気を使い、遮熱剤の活用で夏の高温に備

える。

本年度は、近隣のイチゴ農家からハウスを借り、栽培面積を約8から約31へと大幅に増やした。一人だけでは労働力が足りなくなるだろうと見通し、従業員を雇用する考えだ。また、作業負担を軽くするために、高設栽培に移行したいとも考えている。

今後について玉村さんは「品質が良く、おいしいイチゴを安定して生産できるよう努めるとともに、栽培を続け、この地域をイチゴの産地として、さらに活性化させることに貢献したい」と将来展望を描く。

(三重・伊勢＝東彩乃通信員)